

第十六章 悪魔の舞台

1

午前七時。

テレビが外の様子を映していた。昨日の雨が嘘のように上がり、雲ひとつない快晴が画面に広がっている。

ついにこの日がやってきたのだ。いよいよ元の世界、リアルの世界に戻ることができる。萌黄はすでに朝のシャワーを浴び、用意してもらった新品のTシャツとジーンズを身に付け、その時を待っていた。

ドキドキとソワソワが半々だ。そのせいか身体も少し熱っぽい。

今朝の朝食はヨーグルトだけだった。転送前には空腹にしておいたほうが良いということか？

携帯電話を開いてみたが、ギドラの姿はなかった。また小旅行に出かけたのかもしれない。とっちめてやろうと考えていた彼女は肩すかしを食らった。

午後八時。野宮がテレビに現れた。

「皆さん、おはようございます。昨夜は一部でトラブルがあったようですが、ぐっすり眠れたでしょうか？」

さて本日はこの世界が誕生して九日目。皆さんにはお待ちせしましたが、我々もこの日を待っております。

予告しましたとおり、電力施設も今朝未明、無事に工事が完了しまして、転送装置の稼働が可能となりました。どうか皆さんは八時半になりましたら、エレベーターで地下五階までお上がりください。私は皆さんの故郷へとつながらるゲートを開いてお待ちしております。《

相変わらずの演説口調である。萌黄が小鼻を掻いて眺めているとノックの音がした。むんが顔を出した。

「いよいよやね」

「うん——ごめんな、ギリギリまでいてるつもりやったのに」

「それはええよ。早く元の世界に帰って、お母さんを安心させてあげなさい」

八時半が近づき、廊下には続々とリアルたちが集まってきた。どの顔も期待と不安で上気している。

雛田は、萌黄やむんと話している清香をチラチラと横目で眺めながら、憂鬱の度合いをますます深めていった。昨夜は散々だった。

萌黄に言われたことで有頂天になり、本来やるべきこと——清香への告白——をほっぽり出してしまったのだ。清香とはそれきりだったため、せっかく高めたテンション

ンがいつの間にやらすっかり下がってしまった。カバ松には完膚なきまでに罵倒される始末。一睡もせぬまま悶々と夜を明かしたのだった。

（それでも告白すべきなんだろうか。お前の父親はこの私なのだと——）

八時半になった。

エレベータは静かに降りてきた。扉が開き、和久井助手がおはようございますと挨拶した。

人々が乗り込む。

リアルの菟黄、清香、伊里江、柊、齋藤、ハジメ。
ヴァーチャルのむん、雛田。

駿河炎と彼の母親は、昨夜遅くに上階へと移された。また、リアル of 將軍こと五十嵐もどこかで待機させられていることだろう。

一同の乗ったエレベータは、駆け上がるように九人を上階へと運んだ。誰もが無言だった。

到着し、扉が開いた。そこには緊張した面持ちで関係者たちが居並んでいた。野宮はひとり手を叩いてリアルたちを出迎えた。

「やあやあやあ、ようこそ皆さん。さあどうぞこちらへ。おい、そこ、道を空けたまえ」

手を振りながらリアルを先導する。菟黄も他のリアルたちについていったが、自分の名を呼ぶ声を聞きつける

と、そちらへ駆け出した。父親だった。

「いよいよお別れだな。どうか元気でいてくれ」

萌黄は言葉が見つからなかった。ただしがみついで領くばかりだった。

人混みに一段高い雛壇が設けられている。そこにはあの伊椎製作所の副社長が腰かけていた。特等席から高みの見物を決め込むらしい。

まばゆいほどのライトが研究室を昼間のように照らしている。そしてビデオカメラが砲列のように並んでいた。(まるで宇宙飛行士を見送るみたいな)

転送装置が見えてきた。初めて見た時にあった全体を覆う球面ガラスは取り払われていた。

ライトの光を反射した巨大な六つの輪は、磨かれたモニュメントのように銀色に輝いていた。いよいよここから旅立つのかと思うと、萌黄の心にわだかまっていたものが、どこかへ消えていく気がした。

(後はここにいる人々にすべてを託し、自分は元の世界で平凡な女の子に戻るだけ――)

装置の脇に迷彩服がいた。一瞬ギクリとしたが、シユウの姿を見つけ、ホッと胸を撫で下ろした。

「警備は万全です。ご安心を」

彼は萌黄に敬礼した。

野宮は装置の前にやってくると、腰かけているオペ

レータに合図を送った。オペレータは頷き、目の前のレバーを引いた。

作動音が徐々に高まっていく。転送装置が振動を始めた。

野宮はマイクを取り上げると、テレビ司会者のつもりか、大げさに腕を広げて振り向いた。

「さて、最初に御搭乗なさるのは、どなたですかな？」

リアルたちは互いに顔を見合わせた。未知の体験。未知の乗り物である。二の足を踏む気持ちは否めないし、男性たちは安直にレディ・ファーストとも言いにくい。

「よっしゃ、ひとつわしからお願いますとしようかな。

ジジイ・ファーストや」

前に出たのは、ビッグジョーク齋藤である。

「人より先に乗ってみたいだけだろ」

ハジメが横でぼそっとつぶやいた。

野宮はマイクを振り上げると、大声で叫んだ。

「一人目の挑戦者に拍手ーっ！」

突然言われてまばらな拍手が起きる。齋藤はあわてて問いかけた。

「挑戦者って——機械はあんじょう動くんやろな？」

「百パーセント完璧に動作します！」

野宮は大きな腹を太鼓のようにドンと叩いた。

齋藤は六つの輪の中に足を踏み入れた。人々のざわめ

きが次第に小さくなっていく。

野宮でさえ、やはり緊張しているのか、トレードマー
クのガムを口に放り込むと、激しく噛み始めた。

萌黄はむんの手を強く握りながら、ごくりと唾を飲み
込んだ。

いよいよの、いよいよだ。

2

銀色の輪が回転を始めた。輪は円周方向に回転するの
と同時に立体方向にも回転する。つまり六つの輪は各々、
球の上をなぞるように回るのである。

直径五メートルの輪の内部では、今や重力が消え、齋
藤老人の身体は空中に浮かんでいた。

不思議な光景だった。

銀色の輪はバラバラに動いているようで、どこかリズ
ミカルだ。装置は振動音をほとんど発しておらず、輪が
空気を切る音ばかりが聞こえてくる。

「齋藤さん、ご気分はいかがですかー？」

野宮がマイクで訊ねた。

「——ああ、悪くないな」

装置を囲む人々は瞬きすら忘れて転送装置に見入って
いる。

萌黄は心の中で祈った。

(どうか成功しますように。向こうの世界へのトンネルが無事開きますように)

風切り音はどんどん高くなっていく。老人の身体も回転を始めた。

「アッ」

誰かが叫び、指さした。

転送装置が放電を始めたのだ。小さな稲妻が竜のように輪の上を駆け抜けていく。

(わたしが中においてたら失神したかも)

やがて個々の輪が判別できないほどに回転速度が上がると、装置全体はまるで半透明の球体のようになり、色も銀色から白色へと変化していった。

(次はどないなるんやろ)

萌黄とむんは耳を手で塞いだ。もはや風切り音は不快なほどの高周波に達していた。

耳を塞ぐと心臓の動悸が装置の鼓動のように思えてくる。萌黄は部屋全体が転送装置のような錯覚さえ覚えた。(そろそろかな?)

そう思った時、萌黄の身体がぐらっとよろめいた。床が揺れた気がした。周囲の人々も同じように体勢を崩していた。あわてて床に手をつく者もいる。

「何ごとだ！」

野宮が叫んだが、その途端、部屋の明かりという明かりが一斉に消えた。

どよめきが上がった。

転送装置の発する音も急激に小さくなっていった。

反対に人々の間に怒号がわき起こった。

「どうした、停電か!？」

「工事は失敗だったのか？」

「早く予備電源に切り換えろ！」

それに応えるように、数秒後、部屋は明るさを取り戻した。しかしそれはオレンジ色の “ほの明るい” 程度のものだったが。

ブーイングの声上がる。

「これじゃ手元が見えないじゃないか」

「一体どうということなんだ？」

シュウがレシーバーが鳴り、急いで耳に当てた。

「はい、地下研究室です。……え……そんな」

シュウの目の色が変わるのに気づいた野宮は、萌黄の目の前を横切ると、シュウの腕をつかんだ。

「地上班からか？」

「はい」

「何と？」

「たっただいま電源施設が爆発したと——」

「バカな！ 有り得ない！」

萌黄はハツとした。するとさっきの揺れは爆発の振動だったのか。

「イヤな予感がする」

その時だった。部屋の隅で激しい炸裂音が轟いた。

萌黄とむんは爆風のあおりを受け、転送装置とオペレータの操作していた制御盤との間に飛ばされた。ガツンと頭をぶつけた萌黄の目から火花が出た。

痛みを我慢して薄目を開くと、部屋の様子が一変しているのが判った。

テーブルや椅子はひっくり返り、人々は折り重なるように倒れ、うめき声を上げている。コンピュータや書庫などの下敷きになっている人もいる。

爆発が起きたのはエレベータのそばだ。そこだけ壁が大きく崩れており、無惨にも鋼材が露出している。

「むん、怪我はせえへんかった？」

萌黄はまず親友の身を案じた。ヴァーチャルは怪我をすればおしまいだ。その言葉が頭にチラつく。

「う、うん、ちよつと擦りむいただけ」

手を出すとわずかに指の皮が剥けていたが、砂を放つほどではないようだった。

萌黄は一安心すると、次に周囲を見回した。

(お父さんは?)

膝をついて立ち上がろうとした時、

萌黄は怒り以上に何とも言えない高揚感を感じていた。薄暗い照明のため、伊里江兄は輪郭しか見えない。それでも写真で見たジーンズのジャケットらしき上着を羽織っているらしいことは判った。

(エリーさんはどこにいるの?)

混乱する室内は未だに騒然としているが、雛壇の上に傲然と立つ伊里江兄のいる辺りだけが異質な雰囲気を漂わせていた。

彼は発電施設を爆破した。そしてまたこの研究室を爆発で混乱に陥れ、派手な演出で登場した。

どんな神経をしてるのだろうか？ 彼に善悪の観念などないのか？

まさに悪魔の所業。

自分たちは悪魔の舞台上で踊る道化に過ぎない？

「くそっ、アイツはどうやって入ってきたんだ？ 嚴重な上にも嚴重に警備していたというのに」

シュウが信じられないという顔で床を何度も叩いた。

萌黄は出入口を探して室内を見回した。

地上から降りてくるには、エレベータを使う以外、丸い研究室の両極にある階段だけだ。エレベータは乗るたびに網膜走査されて誰が乗ったのか記録に残される。萌黄は一度も階段を利用したことがなかった。どんなチエツク態勢が敷かれているのか知らない。伊里江兄は

階段を誰にも知られることなく歩いて降りてきたのだろうか？

「この中の警備関係者のかたがたに言っておく」

伊里江兄がまたしゃべり始めた。人々がビクツと身体を震わせる様子が判った。

「私を撃とうなどと思わないことだ。この建物には他にもまだ爆弾を仕組んである。私の身体が衝撃を受けるとひとつずつ爆破する仕掛けになっている。——もつとも、私自身リアルであることをお忘れなく。君たちに撃たれようが私は怪我ひとつしないよ」

「……兄さん！」

伊里江弟だった。彼は足の踏み場のない室内をなんとか兄に近づこうと、倒れた人の間を懸命に這っていた。

「……やめてください！ もう十分です！」

「真佐夫——。愚かな弟だな。後先も考えずにこの世界に飛び込んでくるなんて」

「……あなたのやっていることは無意味です！ 無価値です！ その先には夢も理想もありません」

「少しは言うようになったじゃないか。きつといい友達に巡り会えたのだろう。そういえばお前のガールフレンドの光嶋萌黄さんはどこにいる？」

「ここにいます！」

萌黄は立ち上がりずにはいられなかった。

「やあ、萌黄さん、お初ですな。思ったとおりの可愛らしいお嬢さんだ」

「あなたの目的は何なのですか？」

「君はよく知っているんじゃないかね？ リアルを集めて、ヴァーチャル世界とリアル世界を宇宙の塵にしてしまうためだ」

「弟さんもいっしょに？」

「そうだ。それが彼のためでもある」

「話にならない……」

萌黄は唇を噛んだ。

「そうだ。私は語り合うためにわざわざここへ足を運んだのではないのだよ。君たちを迎えにきたのだ。リアルの人々よ。さあ、立ち上がりたまえ」

真佐吉は手を広げて呼びかけた。しかし伊里江や萌黄の他に反応するリアルはいなかった——

「なんじゃい、もうちよつとで英雄になるとこやったのに邪魔しくさって」

停止した転送装置の奇妙に重なりあった輪をくぐり抜け、怒鳴るように文句を言いながら出てきたのは、ビツグジョーク齋藤であった。

「ご老体はリアルですな？」

「アンタか、みんなを困らしとる悪ガキは」

「ハハハ、あなたのようなご高齢のかたからすれば、私

など洩はなつたらしの小僧に過ぎませんな」

「わしらにどないせいっちゅうねん」

「私といっしょに来ていただきたい。なあに、そう遠くではありません」

「ついて行ったら、どんなメリットがあるんや？」

「人類が未だかつて見たことのない、この世の真実をご覧に入れましょう」

「ほう。なかなか魅力的なセリフを吐きよる。——もし断ったらどうする？」

「悪いが地上の電力施設は破壊させてもらった。あなたがたがここにいても、もはや元の世界に戻ることはできない。そうなれば必然的に、ここにいるヴァーチャルたちはあなたがたの敵となる。あなたがたの命をすぐにも奪おうとするでしょう。彼らの選ぶ道はそれしかありませんからね。——あなたはここにいて、ただ殺されるのを待っているつもりですか？」

4

齋藤は動じた様子もなく背中後ろ手を組むと、伊里江兄を見上げてヒューッと一声、口笛を吹いた。

「ふむ、だんだん盛り上がってきたな。わしはオモロイのが好きや。ここで尻込みすると、ビッグジョークの名

がすたる。アンタの話に乗ってみるのも一興やろ」

そう言うと、さっさと障害物を乗り越えて階段に向かい始めた。

「齋藤さん……」

萌黄には老人の行動が理解できなかつた。面白いからついていくって、そんなんアリ？

老人の行く手に別の人影が立ち上がった。ハジメである。

「お前はどないする？」

問われても応えず、じつと老人を見つめている。

「いつしよに来るか？」

ハジメはこくりと頷いた。

「萌黄っ」むんが萌黄の袖を引つ張った。「どないしたん？ まさか萌黄もついていくつもりやないやろね？」

萌黄はハッと我に返り、戦慄した。自分も決断を迫られていることに気づいたのだ。残るか否か。

そんな萌黄の肩をシュウが叩いた。

「あなたにひとつ忠告しておこう」シュウは伊里江兄に鋭い視線を送りながら彼女の耳元でささやいた。「悔しいがヤツの言ったことは当たっている。真崎隊長代理は、あなたがたが元の世界に帰るといふ前提があつたから、リアルをキルするのを断念した。転送装置が使用不能となつた今、再び彼は、我々にあなたがたを殺せと命じる

だろう。この場はいったん逃げたほうがいい」

萌黄はシュウの顔を見た。その表情からはどんな感情も浮かばない。

「どうしてそんなことをわたしに？」

「いやいやいや」シュウはわずかに顔をしかめると付け加えた。「訊くな」

ざわめく人々の間から清香がすつと前に出た。ピンクのシャツを着ているのでイヤでも目立つ。するとその後ろからネクタイの曲がった雛田が飛び出した。

「おい、真佐吉さん！」

雛田が直接、雛壇に語りかけた。

「何か？」

「ぼ、僕はリアルじゃない。僕のム——姪がそうなんだ。そして僕は彼女の保護者の任を帯びている。いっしょに連れて行ってくれ」

「——いいでしょう。その代わりに、あなたにはお手伝いいただきます。そちらのベッドに横になっている少年を連れてきてください」

伊里江兄は炎少年を指さした。

雛田があわてるように萌黄の目の前を通り過ぎていった。

（お兄さんの思うがままに事態は進んでる）

萌黄は焦った。このままの展開でいいのか？

その時、野宮助教授の声がした。

「萌黄くん、博士が！」

萌黄は野宮のところに駆けつけた。

父・光嶋裕二博士が頭から血を流して倒れていた。爆風で柱に打ちつけたのだ。

博士は目を閉じて意識がなく、血は少ないながらも流れ続けており、皮膚の一部がすでに砂状化を始めていた。

「ああ、どうしよう」

萌黄は野宮を見た。助教授は険しい顔で首を横に振った。

「そんな……」

萌黄は膝の上に父親の頭を乗せた。流れた血が萌黄のジーンズを染めていく。

清香が萌黄のところに駆け戻ってきた。

「ダメよ、両手で傷口を塞がなきゃ」

「そんなことしたって」

「やりなさい」

言われるままに萌黄は両手を父親の頭部に添えた。

すぐに彼女は奇妙な感覚に襲われた。

身体の中で何か生き物のようなものが動き始めたのだ。それは両腕の付け根に集まり、そのまま肘へ、そして手首へと移動し、遂には両手の平が熱を帯び始めた。

「そのまま、そうつとよ」

清香が萌黄の手に自分の手を添えた。

みるみる熱の温度は倍加し、光さえ放ち始めたではないか。どういふことか判らないまま、萌黄はただ父親の傷口を見つめ続けた。

「こうやってね」清香は言う。「怪我を治したことがあるの」

萌黄は口をぽかんと開けて清香の横顔を眺めた。冗談や気休めを言ってるのではなさそうだ。その証拠にダラダラと流れていた血が止まった。

「ん……萌黄……」

「お父さん！」

目を開いた父親は萌黄の腕にしがみついた。口を動かそうとするが思うようにしゃべれないようだ。

「さあ、その辺でよろしいでしょう」

高いところから伊里江兄の声が降ってきた。彼はまだ雛壇にいた。

「急がねば邪魔が入るのでね。……とくにお坊さま、あなただよ！」

伊里江兄は視線を斜め下に落とした。柀拓巳がそこにいた。彫りの深い顔で目だけを光らせている。

「妙な気は起こさぬよう。そのまま進んでもらいたい」

柀はしばらくじっとしていたが、やがて齋藤の後を追って階段に向かった。

「お嬢さんがた。君たちが最後だ。こちらにきたまえ」
萌黄は父親の傷が癒えていることに驚きながらも、父親の頭をそつと床に置くと、清香とともに膝を上げた。

「それでは皆さん、さらばだ」

伊里江兄は床に降りようと動きかけた。

その時、銃声が轟き、伊里江兄の足許を銃弾がかすめた。

5

「動くな！」

真崎は銃を構えたまま研究室に飛び込んでくると、さらにもう一発発射した。キインと跳弾の音が響く。人々は悲鳴を上げて床に伏せた。

「伊里江、降伏しろ！」

真崎は全身を怒りに奮わせていた。

真崎が地上から降りてきた階段は、リアルたちが向かいつつあるほうとは反対側だった。

萌黄は真崎と伊里江兄のちょうど真ん中にいた。彼女はもう一度腰を落とすと、真崎を見、伊里江兄を見た。

伊里江兄は頭を抱えてしゃがみ込んでいた。

(怯えてる——?)

萌黄の目には伊里江兄の反応が奇異に思えた。あれほ

ど不遜極まるセリフを連発した彼にしてはそぐわない反応だった。さつきまでのはずべて虚勢だったのだろうか。

それでもおずおずと顔を向けると、

「やめたまえ。つまらんことをするとまた人が死ぬことになるぞ」

「黙れと言ってる。お前のゴタクはインカムですずっと聞いていたが、よくもまあペラペラしゃべれたもんだ。しかし堂々とここまで潜入してきた度胸だけは褒めてやる。ご丁寧に俺たちが降りてくるのを妨害するために、階段各所に爆弾を仕掛けていたとはな——。どうやってあれだけの爆発物を持ち込んだ？ お前を引き入れた裏切り者がいるんじゃないのか？」

人々はどよめき合った。人類の敵に与^{くみ}する者が研究所内にいる？ そんなことが有り得るのか。

しかし伊里江兄の口調は泰然としている。

「その割には来るのが早かったな。さすが隊長を軟禁してまで目的を果たそうとするだけのことはある」

「このヤローツ」

真崎が引き金にかけた指に力を込めると、伊里江兄の左手が動くのが同時だった。

壁際のパソコンが爆発した。そばにいた何人かが吹き飛ばされ、真崎も床に激しく転がった。

パソコンは跡形もなく破壊され、辺りに火のついた部

品が散らばった。

「イカン、消化器だ！」

野宮が大声で指示した。しかし爆破の被害は予想以上に大きく、四、五人が砂状化の憂き目にあつた。

悪魔は用意周到だったのだ。こちらの手の内がすっかり読まれている。彼は最も効率的なやり方で人々の抵抗心を奪っていった。

(勝てない)

父親に覆い被さりながら、萌黄は恐怖と諦念が心の中に広がっていくのを感じた。

伊里江兄は騒ぎにも飽きたように「行くぞ」と言うと、階段を目指して雛壇を降り始めた。

床で俯せになっている真崎にシュウが駆け寄った。だが萌黄の視線に気づくと「早く行け」と目で合図した。

「萌黄」むんが立った。「わたしも行くから」

萌黄はウンと言った。父親をそばにいた女性職員に頼むと、自分のリュックを背負い、立ち上がった。

混乱の続く研究室を横切っていく。誰もが萌黄に気づくと道を空けた。触れると病気に感染するとも言うように。

階段への出入口では、柘や齋藤らが待っていた。

「アイツは先に階段を昇っていきおった。わしらがついてくるのを露ほども疑うとらんな」

しかたなく萌黄たちも一段ずつ昇り始める。すると後からシュウが追いついてきた。真佐吉は、と問うので萌黄が指を上に向けると、

「追いかけると真崎に命じられた。俺もついていく」

一同は、齋藤、ハジメ、炎少年のベッドを抱えた柵と雛田、清香、萌黄、むん、シュウの順に進んでいく。

エネ研地下研究室は一部の調整室を除けば、地下一階から五階までが吹き抜けになっている。各階には一応通路があり、扉で通路に出ることができるとシュウは言う。

「隊長代理は言った。発電施設の爆発後、すぐに地下に降りようとしたが、こちら側の入口は内側からロックされていたという。それもヤツの仕業だろうな」

さらに声をひそめると、

「あまり急がないほうがいい」

「どうして？」

「通路を通って逆側から俺たちの部隊がヤツの先回りをするようにしている」

「そんなことしたら、またドカンッて」

「隊長代理は、是が非でもヤツを捕えるつもりだ」

また銃撃戦や爆発が起こるのではないか？ 萌黄は全身を強ばらせた。

そしてその恐れていたことは地下三階で起こった。通路側で待ち伏せていた迷彩服が、伊里江兄に奇襲を仕掛

けたのだ。

ドンという爆音がし、煙が階段に広がった。催涙ガスだ。

「やったか？」

萌黄は階段で見えない上階に耳をそばだてた。

(これも伊里江兄の想定の内とか――)

散発的に起こる銃声。入り乱れる悲鳴と靴音。続いて迷彩服と思しき男の声が壁に反響した。

「捕えたぞー！」

6

「なんやて？」 齋藤が素っ頓狂な声を出した。「そんなあつけない……」

萌黄も同感だ。この目で見るとまでは信じられない。

ハジメがとんとんと階段を駆け上り、踊り場から上を透かし見る。催涙ガスの白い煙がまだ晴れていないので、それ以上近寄れないのだ。

「アレ？」

迷彩服の声だった。

「貴様、誰だ!？」

(――ん?)

萌黄も手すりの間から上階を見上げる。なんだか雲行

きが怪しい。

後ろから近づいてきた男がささやいた。

「……どうして昇らないんですか？」

伊里江弟だった。

「だってガスがまだ残ってるし」

「……吹き飛ばせばいいではないですか。あなたはもう空気を操れるのですから」

伊里江弟はそう言つて、踊り場が上がっていくと、両手を合わせて前に突き出した。

「おおっ？」

迷彩服は突然の風に驚きの声を上げた。白い煙は一瞬にして消え去った。

リアルたちは間髪入れず階段を駆け上がる。

ガスマスクを被った迷彩服たちの足許にひとりの男が倒れていた。丈の長い白衣を着ている。

「この人は……」

萌黄は男の顔を覚えていた。昨夜、野宮について地下十階までやってきた研究員のひとりだ。

「山上じゃないか！ お前、何をしてる」

野宮の大声が男の名を呼んだ。彼も後からついてきたらしい。萌黄や清香を押しつけて前に出ると、山上のそばにしゃがみ込んだ。

山上は催涙ガスのせいで目も開けられず、身体を丸め

てしきりにむせっていた。

「ゲホゲホ、何するんですか、寄ってたかって……」

「どうしてこんなところにいる？」

「調整室で、ゲホッ、点検業務をおこなっていたんです。それで階段室に出た途端、煙が、ゲホゲホ」

シュウが山上に顔を近づけ、

「こっちに不審な人物は来なかったかね？」

「来ましたよ、ジージャン姿の長髪の——」

ガスマスクを外した迷彩服が、山上の胸ぐらをむんずとつかんだ。

「どっちへ行った!？」

「アンタ誰って訊ねたんですが、無視されて通路を上るほうに」

迷彩服のふたりはすばやく駆け出した。萌黄たちも一拍置いて後を追う。

エネ研の地下通路は特殊な造りで、ぐるぐると回りながら、螺旋を描いて一本の通路が地上と地下五階をつないでいる。

いま通路の遙か前方から甲高い笑い声が流れてきた。

「真佐吉！」

「ナメた真似しやがって！」

迷彩服たちは怒りを沸騰させ、怒濤の脚力で萌黄を離していく。

(なんかおかしい)

萌黄は走り続けながら、どうにも納得がいかなかった。
(連れて行くといいながらなんで逃げるんよ。ほいで、
なんでわたしらがそれを追いかけてんの?)

あべこべじゃないかと眉を曇らせた。

「いたぞっ！」

右へとカーブしていく通路の先に青い影がチラツと見えた。靴の紐がほどけたのか、壁際にかがみ込んでいる。迷彩服たちはシメたとばかり速度を上げる。萌黄は逆に速度を緩めた。

「どうしてリアルパワーで追いかけないんだ？」

シュウが不思議そうに訊ねる。萌黄は、

「だって、追いついたって、どうしたらええか」

「捕まえるんだよ」

「それはあなたたちの仕事ですよ」

シュウは小さく頷き、先に駆けていった。

真佐吉は靴から手を離すと、驚いたことにこちらに向かって手を振った。

誰もが呆気にとられた。

真佐吉は手を振りながら、後ろ向きに走っていく。

一瞬誰もが毒気を抜かれ、足の動きがおろそかになった。どの目も左右に揺れる彼の手を見つめていた。

「わっ」

「なんだっ」

前に行く迷彩服たちが次々と転倒した。

萌黄たちは危うく急ブレーキをかけた。

「なんだこれは……釣り糸じゃないか！」

ふくらはぎの高さに通路の左右から釣り糸が張られていた。迷彩服たちが転倒したのはこのせいだ。

「あつはははははは」

また真佐吉の高笑いだ。萌黄は前を睨む。

「アイツが仕掛けたのか？」

「とことんフザけやがって！」

迷彩服の怒りは頂点に達した。帽子をつかんで床に叩き付けると遮二無二追いかけ始めた。

「絶対殺す！」 「当然だ！」

迷彩服は腰の銃を抜いた。頭に血が昇って状況を把握できなくなっている。

(ど、どないなの?)

気がつくと萌黄といっしょに走っている集団は、終と野宮だけになっていた。野宮はせり出した腹を揺らしながら、驚異的な足の速さを見せる。

「元野球部エースの俊足、いまだ健在なり〜！」

とうとう出口が見えた。

真佐吉は自分で閉じたロックを開こうとしている。

迷彩服は追いつけるか？

先に重そうな鋼鉄の扉が軋む音をたてて開いた。

太陽の光が差し込む。

真佐吉は一瞬早く外に出ると、扉を閉めた。

迷彩服たちは飛びつくように扉のノブに手を伸ばし、肩口から体当たりした。

(もしまた仕掛けがしてあったら！)

萌黄は息が止まりそうになったが、幸い爆発は起きず、扉はすんなりと開いた。が――。

「わわわっ」

ふたりの迷彩服は足を取られて地面に倒れた。すぐ後ろにいたシュウも共倒れだった。

「ええい、役に立たん奴らだ！」

野宮は柎を抜くと、扉を蹴飛ばして外に躍り出た。

「ありゃ、山中？」

迷彩服がつまずいたのは、山中の身体だった。彼も昨夜来たひとりである。白衣姿のまま地面に倒れ、気絶している。

「あそこです」

柎が指さした。青い影はエネ研を出た足を緩めず、芝生の上を正門目指して一散に駆けていく。

「うゝゝもう許さん。わしの大事な研究員ををを」

野宮のターボチャージャーにスイッチが入った。彼の足は砂埃を蹴立てて、まっしぐらに突き進んでいく。

「すごい馬力だ」

柊も走るのを止めて、野宮の背中を目で追った。

アツという間に真佐吉と野宮の距離が縮まる。

だがさすがに野宮にも疲れが見え始めた。一瞬足がもつれた。

真佐吉は建物の角を曲がろうとしている。

野宮は体勢を崩しながら、口から何かを吐き出した。

ずっと噛みっぱなしのガムだ。

ガムは宙を飛んだ。

真佐吉の姿が建物の向こうに消えた。

野宮は腹を弾ませるようにして地面に倒れた。

「野宮さん！」

柊と萌黄が追いつくと、野宮はぜいぜいと息を切らしながら、

「わしに構うな。追いかける」

と言った。

萌黄はまた走り出した。建物の角を曲がる。

「えっ、——今度は!？」

そこにはまた白衣の人物が仰向けに倒れていた。

「するとこれは——山下さん？」

顔までは覚えていなかったが間違いないだろう。

「……はははははははは」

遠い笑い声。萌黄は声のほうを見る。しかし正門へと

続く道は豊かに茂る木々の枝葉に隠されて見えなかった。遅れて、シユウたち迷彩服と柊がやってきた。

「真佐吉は？」

萌黄が正門の方向を指さすと、三人の迷彩服はそちらへと駆けていった。

柊が山下に気づいた。

「また研究員さんですか」

「そうみたいです」

萌黄は芝生の上に尻餅をついた。柊も横に並んで腰をおろした。ふたりとも肩で息をしている。

柊は額に手をかざして木々の間を見つめながら、

「真佐吉という人は……おそろしく……健脚ですね……それにしても……逃げるなんて……一体何をしにきたのでしょうか？」

7

「この展開が、真佐吉さんのシナリオどおりやとしたら……」

「と言うと？」

「あの人は無駄なことはしません。これまでの行動もすべて計算づくでした」

「彼をよく知ってるような口振りですね」

「——はい」

芝生の上をもくもくと影が動いている。ふたりは影をたどって背後に目をやった。

自分たちが出てきたエネ研の円筒状の建物。その脇に貼り付くようにして建設されていた発電施設。今それが黒煙をもうもうと吐き出している。数人の作業員が消化器を持って走っていった。

「少なくとも我々が元の世界に戻ることはだけは阻止しました」

「発電所が復旧できなかつたら、そうなりますね」

「そうならないよう全力を尽くす！」

突然野宮の声が頭上から降ってきた。彼は息も絶え絶えといった様子で立っていた。

「先生、あの、山下さんが」

「ああ、なんでコイツまで倒れとるんだ？」

野宮は弾む息もそのままに、どっこいしょと芝生に膝をつく、山下の頬を乱暴に張った。

「おい、起きろ」

山下はウウンとうめいた。

「あ……先生」

「あ、じゃない。お前、こんなところでサボっていたのか？」

「ち……違いますよ。……書類を見ながら歩いてたら、

突然人がぶつかってきて……そこから覚えてません」

「いやはや、山上山中といい、やわな連中ばかりだ」

山下は白衣の襟を治しながら上体を起こした。

それを見ていた萌黄はハッと顔色を変えた。

「山下さん。白衣の下に着てるのは何ですか？」

問われた山下は一瞬青ざめたようだが、

「普通のネクタイとワイシャツですよ」

そう言つて横を向いた。

「いえ、白衣とワイシャツの間です」

野宮も不審に思つたらしく、山下に近寄つた。

「おい、前をはだけてみい」

山下は躊躇する素振りを見せたが、野宮には逆らえず、きつちり止めていたボタンを外した。

ジージャンだった。

「ネクタイににジージャン？」

「いけませんか。何を着ようと私の自由です」

「ではそのジージャンの懐にあるものは？」

柊が指摘した。萌黄の目にもそれが見えた。

野宮が手を伸ばしてつかみ出す。

「カツラじゃないか！」

「いけませんか？ 最近頭髪が気になつてるんです」

「なかなか長髪のカツラですね」

「私の自由です」

そのやりとりを見ていた萌黄が突然、山下の襟首をつかんだ。

「何するんですか！」

「ちよつと脱いでください」

「いい加減にしてくださいよ。私には仕事が——」

「脱げ」

野宮が静かに言った。

「先生……」

「わしはお前以上に忙しいんだ。早く脱げ！」

山下はしぶしぶ白衣を脱いだ。

ところが背中が何かに引っかかって脱げない。

「あれ、おかしいな」

「ちよつと待て」

野宮が山下の背後に回った。そして白衣の襟をつかんで勢いよく引き剥がした。

「山下、これは何だ？」

「えっ……さあ」

「なぜ背中にガムのカスが付いている？」

「……………」

野宮は鼻を近づけた。くんくんと鼻を鳴らす。

「間違いない。これはわしのお気に入りのガムだ。しかもまだ新しい」

「さあ……誤って付いちゃったんでしょ」

「トボけるな。白衣の下にどうやって付くんだ！ しかもこれはわしがつい今しがた、真佐吉に向かってこの口から飛ばしたガムだ！」

ここに至って、言い逃れはできなくなった。

「山下！」

強い陽射しに照らされた山下のこめかみにツーツと汗が流れ落ちた。彼はぎゅつと目を閉じると、芝生の上に両手をついた。

「も、申し訳ありません！」

8

エネ研の出口から、次々と仲間が現れた。

清香、齋藤、ハジメ、炎少年のベッドに付き添う雛田。少年のベッドは現在、少年の意思とは切り離されている。しかし電動モーターにより自走するので雛田はただ方向を導くだけだ。

少し遅れて伊里江真佐夫も出てくる。顔色が真っ白だ。誰もが芝生に頭をこすりつける山下に不審の目を向けた。

「すみませんでした！」

「謝ってばかりじゃ埒があかんぞ」野宮が叱る。「どうやって真佐吉になりすましたんだ。山上山中とも示し合

わせたんだな？」

「——いえ、電話がかかってくるんです」

「電話？ まさか真佐吉から直接にか」

「——そうです」

「驚いたな。直にやりとりしとったとは……」

「私はただ言われた通りにやっただけです」

「真佐吉に化ける、とか？」

「もつと具体的にです。ジージャンを着てエネ研の出口で待機している。山中が飛び出してきたらタッチ交替して駆け出せ。建物の角を曲がったら、あらかじめ置いてある白衣を羽織り、気を失ったフリをして地面に横たわれ——そんな具合にです」

「……」

「逆らえませんでした。私は——弱みを握られていますし、おそらく山上や山中もそうでしょう」

「弱みとは何だ」

山下は激しく首を振る。

「——それだけは言えません。勘弁してください」

「爆弾を仕掛けたのもお前たちか」

「——はい」

「どうやって持ち込んだ」

「電話で連絡が入ります。学内のどこそこに行けば置いてある。それをうまく地下に持ち込め、と」

「どこの誰が学内に持ち込んだ？」

「それは私にも判りません。山上か山中かも知れませんが、他の者かも知れません。ただ、山上たちとはこの件で決して話し合うなど厳命されていました」

「驚いたな。すると真佐吉には、学内の警備体制や人事に関する情報が漏れていたことになる——」

その時、ひとりの作業員が発電施設のほうから全力で駆けてきた。彼は野宮を見つけると、

「ダメです。施設は完全に破壊されました。復旧に一ヶ月を要するとのことですよ」

その絶望的な報告に誰もが言葉をなくした。

野宮の携帯が鳴った。

「何だ!? ……ああ ……本当か!? ……」

電話が切られる。野宮は目を閉じて眉間をこすった。

「どうしたんですか？」

萌黄が訊ねると、

「地下五階の研究室からだ。中枢コンピュータにウイルスが侵入し、転送プログラムが消去されたそうだ」

転送プログラム。転送装置を制御するために必要不可欠なソフトウェア。

「その代わり、メッセージがひとつ残っていたという。」

“研究費を着服してHなビデオを買い漁った男”とは何のことだ？」

「す、すみません！」

山下は頭を芝にこすりつけた。

野宮は啞然とし、天を仰ぐとがっくり膝を落とした。

「これで万事休すか——」

うなだれる野宮を慰める者はいなかった。

萌黄は木陰に目をやった。その向こうに正門がある。

逃走したと思われた真佐吉は、実はここには来なかった。彼は一步もキャンパスに足を踏み入れることなく、電話だけで発電設備を破壊し、転送装置を使い物にならないがらくたにしてしまった。

真佐吉だと思っていた人影が真崎に撃たれた時、彼のふるまいが傲岸な口調にそぐわないなど感じた。今にして思えば山上が影武者を演じていたわけで、真佐吉の声を携帯を通じて流していたのだらう。あの時に気づくべきだった。

三人の研究員の弱みを握って自分の影武者に仕立て上げ、まるでドタバタ喜劇のような追跡劇を演出した。釣り糸のような余計な小道具まで使って。

明らかに真佐吉は楽しんでる。

そして萌黄は気づいた。真佐吉が自分たちリアルをエネ研から連れ出そうとした理由を。

「逃げろ」と言っているのだ。

転送装置が使用不能になった今、シュウの言ったとお

り、リアルな立場は再び、抹殺すべき存在へと墮ちたのだ。

幽閉されていた地下からこの地上まで案内すれば、あとは自力で逃げられるだろう。いや逃げるしか道はない。どこへ？

(やっぱり、大津か――)

真佐吉は自分がここへ来た時に使った転送装置を持っている。離島の隠れ家にあつた転送装置もない今、元の世界へのトンネルはもはやそこしかない。

(でも、それが自分たちをおびき寄せる餌でもある)

悔しいが真佐吉のシナリオどおりに動くしかないのだ。萌黄は柊の袈裟の袖を引っ張った。

「逃げましょう」

柊も悟つたらしく、

「私もそれがいいと思っていました。今がチャンスです。他のリアルたちに声をかけてきます」

萌黄はむんを探した。見当たらない。

彼女は焦った。まさかむんを残していくわけにはいかない。それに久保田も。

駆け足になった時、エネ研の出口に真崎が現れた。

「聞けい、リアルたち！」

その声は聞く者を不快にする響きがあつた。

「今すぐ地下に戻れ。このまま逃げようと思うな。さも

ないと人質の命はないぞ」

9

(しまった、むんが！)

萌黄は唇を噛んだ。

齋藤らと話していた柊も動きを止めた。

真崎はふてぶてしい笑いを浮かべながら芝生の上に出てくる。左目の傷は陽光を浴びるとますます毒々しさを増して見える。

「こんなところでグダグダやってる暇はない。さつさと建物の中に入れ。こちらには光嶋萌黄、お前の父親や親友さんがいるんだぞ。」

他のリアルたちも同じだ。転送装置は修理すればまた動く。ここより他に行くところなんてないだろ」

真崎の登場を合図に、学内の迷彩服たちが八方から集まり出した。

萌黄は柊に近寄った。

「人質がいるのはわたしだけです。あなたがたは先に逃げてください」

「あなたは？」

「隙を見てむんたちと脱出します」

「ひとりでは無理です。わたしも——」

「いいえ」 萌黄は柗の言葉を遮った。「真佐吉は必ず大津のどこかに潜んでいます。彼は自前の転送装置を持っています。彼のアジトを探してください」

「判りました。真佐吉は一筋縄では行かない男。罫には十分気をつけますよ」

柗は清香と雛田のところに向かった。

シユウたちが正門から戻ってきた。「取り逃がした」と悔しそうに話している。

萌黄は堂々と真崎の前に進んだ。

「ほう。さすがに肉親の情は切れないか」

「卑怯者」

「何とでも言え。俺にとっては真佐吉の野望を打ち砕くことこそ唯一の使命だ。他には何もない」

萌黄は仲間の様子を眺めた。

柗は清香と雛田の、とくに雛田の説得に時間がかかっているようだ。そうしている間にも続々と迷彩服たちが集結してくる。

(急がんと連行されてまうやん)

また地下に押し込まれたら、今度こそそこが墓穴になるだろう。こんなチャンスは二度とない。

ダァーンッ。

真崎が空に向かって撃った。

「ぐずぐずするな、お前らに選択肢はない！」

真崎の苛立ちが頂点に達しようとしていた。

だがそれ以上に苛立ったのはハジメだった。足許に落ちていた石ころを拾うと、おもむろにセットポジションに入った。

「あ、サイドスロー」

野宮が言うよりも速く、ハジメの投げた石は真崎の手に当たり、拳銃をはじき飛ばした。

ウツとうめいて手を押さえた真崎にハジメはひと言、

「お前、うるさい」

と唾を吐き、さらに石ころを拾い始めた。

他の迷彩服たちが驚いて腰の銃を抜き、あるいはマシンガンを構える。だがハジメはどこ吹く風で集めた石を手の中で見つくるっている。

「石を捨てなさい」

ひとりの迷彩服が言った。しかしハジメはチラツと見ただけで不敵に笑った。

次の瞬間、萌黄にはハジメが消えたように見えた。いや、ブレたと言ったほうが正しい。彼は周囲にいた十数名の迷彩服を標的に、持っていた石を投げたのだ。

わずか一秒足らずの出来事だった。十数個の小石がハジメを中心に放射状に発射された。

ある者は頬に受け、ある者は指に受け、そしてある者は足を払われてその場に倒れた。

「あばよ」

ハジメは捨て台詞を残すと、伸ばした両手で輪を書いた。アツという間にハジメの身体は回転を始め、人間ゴマと化した。

芝生が千切れ飛び、緑の吹雪が起きる。

風は竜巻になり、空高く伸びていく。

萌黄は風を避けて指の隙間から見ていた。

竜巻は轟音とともに空に舞い上がった。それはまるで竜が空に昇っていくようだった。

やがて竜は空高く上がり、太陽に重なったかと思うと、街並の向こうに消えていった。

残された者たちは呆気にとられるしかなかった。

萌黄もただ東の空をじっと見つめていた。

「いないぞ！」

我に返った迷彩服たちがようやく騒ぎ始めた。

「いない。齋藤とその孫と坊さんが消えた！」

「あの竜巻に乗って行ったってのか」

「そんなバカな……リアルパワーってヤツか」

萌黄は手をかざして空を見ながら、

（ハジメ君が連れていったんや。いつも黙って隅っこにいるから、一度もしかべらへんかったけど、リアルの力を使いこなしてたんやな。そういや初登場のときもおじいちゃんをおぶって空から降りてきたし）

残ったのは萌黄と清香、そしてベッドに寝たままの炎と腰を抜かしている雛田。

「くそっ」真崎はブーツに仕込んであったナイフを抜いた。「こうなったら手当たり次第だ」

真崎のナイフが萌黄に襲いかかった。

「わっ」

萌黄は短く叫んで、かろうじてよける。単に足がもつれてバランスを崩しただけだったが。

真崎の顔は鬼と化していた。素早くナイフを持ち直すと、倒れた萌黄の首筋を狙って振り下ろした。

ズサッ。

肉を立つ音が真崎を恍惚とさせた。

10

(仕留めた！)

真崎は手応えを感じた。

と同時に、不穏とも言うべき奇妙な気配が、ナイフの切っ先からハンドルを握る手に這い上がってくるのを感じ、真崎は反射的にナイフを抜いた。

「なんだ!？」

彼は心の底から面食らった。

自分の刺したのは萌黄の首筋ではなく、突然現れた男

の突き出した右腕だった。

男は腕から血を滴らせながら、髭の下の口を開いた。

「婦女子に対する乱暴狼藉など、およそ男子たる者のすることではないわ」

男が誰なのか、真崎はすぐに思い出せなかった。それが周囲から閣下と呼ばれ、認知症の疑いのある老人であることに気づいた時には、老人の手刀によって真崎のナイフは払い落とされていた。

真崎は老人とは思えぬ手練の技に目を見張った。

(コイツ、軟禁した部屋からどうやって出てきた?)

老人は刺された二の腕をさほど痛がる様子もなく上下に降ると、倒れている萌黄に近づき、言葉をかけた。

「お嬢さん、怪我はないかな」

「——あ、どうも」

「お嬢さんとはどこかでお会いしましたかな」

「はい……昨日」

「ふむ」

老人は口髭を指先でひねりながらにこやかに微笑んだ。

どうやってあの牢屋を脱出できたのか。彼もリアルだから転送される予定だったはずだ。山ナニガシさんがうまく言って連れ出したのかもしれない。間違いないだろう。

萌黄は五十嵐老人の目を覗き込んだ。

(透き通るような青い目――)

萌黄はその目に寂しげな色を読み取った。目の奥から助けを乞う声が聞こえてくるような。

しかし老人はすぐに顔を上げ、銃を拾い上げた真崎に両手を広げて相対した。萌黄の盾となるつもりらしい。

銃を構えた真崎は引き金を引かない。リアルを撃つても無駄なことを知っているのだ。不意をつかない限りは。迷彩服たちはじりじりと包囲の輪を縮めてくる。

(マズい。生け捕られたら逃げるのは無理かも)

「――閣下！」

キーの高い声が老人を呼んだ。五十嵐はエネ研に顔を向けた。萌黄も遅れてそちらを見る。

細長い物体が五十嵐目がけて飛んできた。彼はそれを片手で受け止めた。サーベルだった。投げたのは狐目の信太。彼も無事に逃げ出したらしい。

五十嵐は冷たく光る刀身を抜き放ち、切先を真下に向けた。そして祈りを込めるように目を閉じると、気合一閃、サーベルを地面に突き立てた。

何をするつもりだ？

誰もが息をひそめた。

しかし何も起こらない。

「ジイさん。ファンタジー映画の仙人にでもなったつも

りか？ もう悪あがきはやめ——」

……ズズズズズズズズズズ。

こもった地鳴り音が真崎の口を閉じさせた。

地面が小刻みに揺れ始めた。

萌黄は両足を芝生の上に踏ん張った。揺れは大きくなりつつある。目の前の五十嵐は立ったままだ。

「おじいさん——まさかコレ……」

五十嵐は何ごとかをしきりに口の中で唱えている。

真崎も膝を折った。もはや銃を構えるどころか姿勢を保つのも難しい。

萌黄は胸の中で早く鎮まると念じた。しかし揺れはそんな思いに反してますますひどくなっていく。

ガクツと地面が傾き、萌黄は悲鳴を上げた。

目の前にパツクリと裂け目が開いた。黒々とした土が飢えた地底怪獣の口腔のようにせり上がってくる。

キャンパスのあちこちで地面が割れ、樹木が倒れていく。建物さえ壁が崩れ始めた。

誰かの悲鳴が耳を叩いた。地中に吸い込まれたらしい。それでも揺れは止まない。

(空腹でよかった。少しは酔わないですむ)

萌黄はそんなことを考えながら、自分はこれで終わりかもしれないと思った。

最後の揺れが消えた後も、萌黄は身体を動かすことができなかった。

いったいどれほどの時間が経過したのだろう。携帯を確認する気も起こらない。

太陽はまだ東の空——萌黄には西の空だが——にある。両膝をゆっくりと立て、両手を地面に踏ん張って上体を起こす。そして周囲を見渡した。

萌黄は狭く盆地のように凹んだ場所にいた。あれほどきれいに刈られていた芝生はズタズタに引き裂かれ、のみならず、地面はくしゃくしゃになった布のように盛り上がり、さながら林立する奇岩のように萌黄の周囲を大きく囲っていた。

五十嵐老人は露出した岩塊の陰にいた。前のめりに帽子をかぶった頭を土の中にめり込ませ、気を失っていた。

11

「閣下ーっ」

信太が岩の上にひよっこりと顔を出した。萌黄は「こです！」と手を振って応えた。

信太のに続いて久保田が現れた。続いてむんと清香も。彼らは岩場に足を掛けながら、一列になって降りてくる。

「危ないよー」

萌黄は心配したが、そんな声をよそに彼らは斜面を器用に滑り降り、萌黄のそばへと無事に降り立った。

「みんな怪我させへんかったんやね」

「俺たちはエネ研に逃げ込んだんだ。建物も多少揺れたけど、さすがに頑丈でビクともしなかつたよ」

久保田は笑顔を見せた。

「でも他の校舎はかなり倒壊したみたいやけど」

むんが眉を曇らせて言う。

信太は五十嵐の横に侍って「閣下、閣下」としきりに呼びかけている。五十嵐はウーンとうなり声を上げた。

久保田はそれを見て立ち上がると、

「他にも助けなきやならん人がいる」

と言つて、降りてきたのとは逆側の岩場に歩き出した。

「おーい、伊里江くん」

見ると岩陰から男性らしき二本の足が覗いている。伊里江真佐夫らしい。萌黄はあわてて腰を上げた。

幸い、伊里江も気を失っているだけだった。久保田は彼を背負つて、足場の悪い地面を慎重に戻ってきた。

伊里江は五十嵐の横に降ろされた。

「顔色が悪いな」

「今日はずっと調子悪そうにしてみましたけど」

萌黄は伊里江の額に手を当ててみる。

「うわ、熱い」

「病気だったのか」

「熱冷まし用のシートならありますが……」

その声に皆がエツとなった。

「和久井さん！ あんたいつの間に」

「怪我人がいたらと思ひまして」

和久井助手は膝を折って、持ってきた救急箱を開いた。

「そういえば」 萌黄は自分の額に手を当てながら、「わたしも今朝からちよつと熱っぽいかなと」

「どれ」

と久保田は手を伸ばしかけたが、あわてて引つ込めた。すぐ横で和久井助手が鋭い視線を送っていた。

「どれどれ」 むんが手を当てた。「うん、ちよつと高いかもね」

萌黄は伊里江の横で笑いながら、

「ひよつとして、リアル特有の熱やったりするかな」

「全然笑われへんよ、それ」

むんが真剣な口調で言った。

「とりあえず俺が担ぐから、エネ研に戻ろう。信太さん、あんたもそれがいいだろう？」

「ハ、ハイ」

久保田は伊里江と五十嵐の身体を両肩に乗せた。さすがに力持ちだ。そんな久保田に和久井助手は熱い視線を注いでいる。

その時だった。彼らのいる場所から数メートルの高みにある岩場の縁に、いくつかの顔が現れた。

また迷彩服か？ 萌黄たちは緊張した。

しかし覗いた顔は敵ではなかった。

「おーい」

「生きてるかー」

「ン？ あそこにおるの、確か例のリアル・ガールやないか」

「そやそや、モエギちゅう女の子や」

「おほほーい、モエギちゃん！」

彼らは発電施設の現場で働いていた作業員たちだった。グレイの作業服が何よりの証拠。

萌黄は手を振った。作業員たちも振り返す。

「どっかにロープか何かないか」

「あるある。取ってくるわ」

「モエギちゃん、ちよっと待っててな」

作業員たちは助けしてくれるつもりらしい。

「誰だい、あのオッサン連中」

久保田が訊くので萌黄は説明した。むんもへーと驚く。

「アイドル並の声援やね」

そうしているうちにロープが届いた。

林立するいびつな岩陰には見覚えのあるグループリーダーの顔も現れた。萌黄はまた手を振った。しかしリー

ダーはにこりともせず、ロープを投げ下ろそうとする仲間を制止した。

「へ？ どうしました」

「助けることはねえ」リーダーは言った。「アイツはリアルだ」

「知ってますけど……」

「バカ野郎！ おめえたちまだ判ってねえのか。俺たちの作った発電施設は使いモンにならなくなった。これでリアルは元の世界に戻れねえ。そしたらあのコはどうなる？」

「——爆発しちまう」

別の作業員が応えた。

「そうだ、北海道を消しちまったみたいにな」

あたりが静まり返った。作業員たちの顔が重く沈んだものに変わった。

ヒュンツと石くれが飛んできた。萌黄をかすめるようにそばに落ちる。続けていくつも石くれが投げ込まれた。

「悪魔め！」

「自爆娘！」

小ささまざまな石が、火山弾のように萌黄の頭上に降り注いだ。

「やめてっ！」

コブシ大の石つぶてが、頭を庇って上げた肘をかすめた。萌黄は「ひっ」と叫んで腰を引いた。その足許に別の石が襲いかかる。

逃げるスペースはどこにもない。

萌黄たちは文字どおり、投石の狙い撃ちに晒さらされていった。

「俺の後ろにまわれ！」

久保田は屈んで皆の盾になろうとするが、飛んでくる石の数は増えるばかりだ。いくら頑丈な体格でも防ぎきれぬものではない。

「きゃっ！」

「わっ！」

女性たちはなす術もなく地面にうずくまる。彼女らもすでに腕や足に擦り傷を負っていた。

(標的は、わたし！)

萌黄は投石を止めるよう説得しようと、久保田の陰から両手を挙げて飛び出した。

ゴスツ。

萌黄は飛んできた石をまともに額で受けてしまった。額は鈍い音を放った。刺すような痛みが首筋まで駆け抜

けた。瞬間、彼女の視界はブラックアウトした。

「バカッ、軽率な！」

久保田がつかもうと伸ばした手も虚しく、萌黄の上半身はエビぞりになって芝の裂け目に落ちた。

作業員たちの投石は執拗だった。

投げれば投げるほど自分たちの怒りを増幅させていく。彼らのひとりが、「こんなものがあつたぞ」と迷彩服の落としたマシンガンを拾い上げた。

「ああ、ヤバイ!!」

全身打ち身だらけの久保田は、作業員が持ち上げた黒光りのする筒を見て、激しく動揺した。

「俺には跳ね返せない。逃げるんだ！」

叫ぶと、信太や清香らを乱暴にせき立てた。しかし耕地のように波打った地面は足を取られるばかりで、容易に先に進めない。

久保田は萌黄を起こそうと彼女の両足をつかんだ。

裂け目から引き上げられた萌黄の額は紫色に変色していた。ひどい内出血だった。

(リアルじゃなかったら割られていたろう)

タ、タ、タ、タ、タ。

マシンガンの音だ。萌黄を抱き起こしながら見上げると、作業員が危なげな足取りで荒れた斜面を降りてくる。狂ったように銃弾を撒き散らしながら。

夕、夕、夕、夕、夕。

「素人のくせに、ワッ！」

掃射の雨が足許を横切った。久保田は萌黄の上に覆い被さって、間一髪、被弾を免れた。いや——。

「……ウ、ウソだろ」

久保田は動転した。顔の高さに上げた右手には、小指と薬指がなかった。付け根から血に混じって、真っ赤な粉雪が舞散っている。

彼の背中をかつてない戦慄が走った。

長年の漁師生活では幾たびとなく命に関わる経験はしたし、じつさい大怪我を負ったこともある。しかし萌黄の家で耳を撃たれた際、耳たぶからぼろぼろと砂がこぼれ落ちるのを見た時は、大きなショックを受けた。

いま二本の指を失った手の平は、その根元から砂に変貌しようとしている。それを目の当たりにすると、久保田はパニックに全身が包まれていくのを抑えることができなかつた。

「うろうろ……」

そのあふれ出した血が萌黄の顔にも落ちた。

「ん、んん」

頬にかかった血はすぐに砂状化したが、わずかな温かみが萌黄を正気に戻した。

「ここどこ？」

萌黄は両手でもがく仕草をした。

「アレ、アレ、アレレ」

今度は手を顔に当ててこすった。そして顔の上にも何もないことを知ると、

「目が、目が見えへん！　なんでー」

萌黄は恐怖のあまり身体を硬直させた。彼女の開いた目は左も右も、洞窟のように暗い空間しか瞳に映さないではないか。

「誰か！　誰かいてへんのー!!」

「あうううう」

「あ、久保田さん？　久保田さんやね？」

しきりに呼びかけるが、うううと唸り声ばかりでまともな返事が来ない。

「どうしたん、久保田さん！」

重ねて呼んでも答えはない。

（何が起きてる？）

目を閉じて瞼をこすっても、開いた目には依然、光が差さない。目が故障してしまったのか！

ザ、ザ、ザと斜面を滑り降りてくる音した。

「こ、このオンナ、まだ生きてやがる」

硬い筒先が萌黄の頬を小突いた。その金属の筒は明らかに熱を持っていた。

「——とどめだ、往生しろ！」

萌黄の危機をいち早く察したのはむんだった。彼女は足場の悪い地面を取って返す暇がないと知るや、掘り返された土の中から目についた石を拾い上げ、男に向かって、えいっとばかり放り投げた。

石は、銃を構えた作業員に届かず、足許にポトンと落ちた。しかし作業員はそれが自分に投げられたものと気づき、

「何しやがんだよー」
と筒先をむんに向け直した。作業員の目はもはや常人のそれではなかった。相手がリアルかどうかなど、とうに頭から消えている。

マシンガンが唸りを上げる。むんはかろうじて地面に突っ伏して銃弾をやりすごした。

(どうにかせんと！)
思い切って投石したものの、銃を向ける相手はやはり怖い。身体の震えが止まらない。なんとか身を守らなければ。

「おめえら、まとめて始末してやる！」
ますます狂気を募らせていく作業員が迫ってきた。

《——黄さん、萌黄さん》

「ああ、ギドラ、帰ってきたんや」

《早く起きなよ。絶体絶命じゃないか》

「目の前が真っ暗で何も見えへんねん。わたし、どこに
いてるの？ 助けてよ」

《ああ、額に直撃を受けたんだね。一時的な視力喪失さ。
手の平を額に当ててごらん。すぐ治るさ》

萌黄は言われたとおりにした。すると、じんじんとする
痛みが手の平の温かみに触れると、砂漠に雨が降るよ
うにスーッと癒されていく。

だが事態はそんなことにおかまもなく進行していた。
ざざつと擦るような足音。はあはあと荒い息遣いが、
すぐ間近で聞こえた。

《マズい、銃を持った男がそばに来た！》

萌黄は目を開いた。

さつきまでとは違って、視力がかすかに戻っていた。

まだ薄暗がり程度の光しか感じられないが、それでも
ぼんやりと見える。挙動不審な男。

『何しやがんだよー』

忌まわしい連射の音。

短い悲鳴。むんだ。

「ああ！」

萌黄は起き上がろうとした。しかし、肩が地面の裂け

目にめりこんで、思うように抜けない。

《リアルの力を使うんだ!》

「そんな、どうやって——無理やよ」

《いい加減、カワイコぶるのはやめなよ! 親友が死んでもいいの?》

ズキツと額に激痛が走る。

(甘えてる——?)

『おめえら、まとめて始末してやる!』

ぼやけた人影が両肘を上げた。銃を構える姿勢だ。

萌黄の目がみるみる視力を取り戻していく。右を向いた作業員の輪郭がくつきりと浮かび上がった。

その顔を見忘れはしない。萌黄に握手さえ求めてきた作業員たちのリーダーだった。

(一度はわたしの味方やったくせに——許せない!)

萌黄は息を吸い込み、怒りにまかせて両手を前に突き出した。

パーンツ。

空気の割れる音が雷鳴のように轟いた。

気圧が変化して萌黄の身体がふわりと宙に浮く。

視界は乱れ飛ぶ芝生のかげらでグリーン一色に染まった。

激しく回転する萌黄の身体。

上下も左右も判らない。

そして突然、萌黄は腹を下にして地表に落下した。

「むわっ、ぺっぺっ」

口に入った土や草が入ってしまい、顔をしかめて吐き出す。それでも素早く周囲の様子をうかがうことは忘れなかった。

「うわ、こんなとこまで……」

五十嵐の起こした地震。その震源地はまるで巨大なアリジゴクの巣だった。自分はその底にいたはずである。なのに今は遥か上から見おろしている……。

すり鉢の一方がまるでブルドーザーの通り道のように崩され、均ならされている。その外側には吹き飛ばされたと思われる大きな土塊つちくれが、あちこちにごろんと転がっている。内から外へ、大きな力が通り抜けたのは明らかだ。

「わたしが——やったん——やな」

土塊に混じって、そこここに作業員たちが倒れていた。怪我をしなければいいかと心配になる。

すり鉢の底では、清香やむんたちが起き上がる姿があった。

（よかった。わたしのやったことは正解や。自信を持つとう）

ふと、自分の手の下にグレイの布地を敷いていることに気づいた。やはり作業着だ。中身がない。まさか。

襟の辺りから腕をたどると、袖の膨らみの陰に、砂と

化した手があった。その先にマシンガンが落ちている。

リーダーの成れの果てなのだ。

萌黄は目を閉じ、両手を合わせて拝んだ。

彼女は何も考えない——考えないでひたすらリーダーの冥福を祈った。

もう悔やむまい。後悔すまい。くよくよ考えるのはすべてが終わりを迎えてからにしよう。萌黄はそう決心した。

必要ならば、リアルパワーも積極的に使おう。望んで得た力ではないが、いま使わなければ——元の世界に帰ってからでは遅いのだ。

(そう、わたしは絶対に元の世界に、自分の生まれた世界に帰ってみせる)

目を開いた。そして危険な人影がないことを確かめると、再びすり鉢の底に降りていった。

仲間たちは無事だった。久保田は手の怪我を清香がリアルパワーで“治療”していた。砂状化は指だけで済みそうだ。五十嵐と伊里江は気を失ったままだが、むんも信太も和久井助手も擦り傷だけで、大した怪我はなかった。

しかし、左手(萌黄から見て)の指を失った久保田の落胆は相当なものだった。

「包丁、握れないなあ、これじゃあ」

力なく微笑む横で、和久井が「わたし、握れるようになりませう」となぜか力説していた。

萌黄は彼らに囲まれると、くたくたと地面に座り込んでしまった。そんな様子にむんは、

「さっきの、スゴかったよ。萌黄がまるで風の神様に見えた」

苦笑いを返す萌黄の耳に、大型車のエンジン音が聞こえてきた。

また敵か？

疲れた身体に鞭打って立ち上がる。

やがてすり鉢の縁に大型の乗り合いバスが現れた。急ブレーキがかかる、ドアや窓を問わず、若者たちがいつせいに降り出してきた。

「閣下！」

「ご無事ですかー？」

彼らは大声で呼びかけながら、転がる勢いで斜面を降りてくる。

信太が前に出て手を振った。

「こっちこっちー」

そして振り向くと、彼らは皆、五十嵐“閣下”を慕って集まった仲間なのですと説明した。

彼らによって五十嵐は無事引き上げられ、萌黄たちも助け上げられた。

「どうやって入ってきたの？」

むんが質問すると、仲間の一人が笑って応えた。

「地震で櫓が倒れたりして、いま正門はものすごい混乱状態なんです。その隙に乗じて、煙幕を焚きながら強行突入しました。急ぎましよう、追っ手が来ます」

萌黄たちを乗せたバスは地割れを避けながら通用門へと全速力で走り抜けた。

通用門側でも別の仲間たちが待っていた。彼らによって撒かれた煙幕がこちらでも奏功し、見事、バスは門を突破して、そのまま裏通りを疾駆した。

みるみる京都工大のキャンパスが遠ざかっていく。

「我々はどちらに行けばいいんでしょうか？」

ハンドルを握る元バス会社勤務の男は、そばで前を見つめる萌黄に問いかけた。

「このまままっすぐ、東へ向かってください」

萌黄はきっぱりとした口調で応えた。

〈第十七章につづく〉